◎おもな出土遺物

弥生土器（やよいどき）

煮炊きに使われた甕や貯蔵に使われた壺をはじめ、みつかった多量の土器の大半は弥生時代終末期のものです。このことは、今回の調査で確認された複数回の土木工事が、この期間内に行われたことを示しています。

刳物（くりもの）

刃物で木材を丁寧にくりぬいて成形しています。木製容器と思われますが、壁面と底部には細い工具で複数の孔があけられており、どのように用いられたのか興味深い資料です。

建築部材

木造構造物のなかには、建物の部材を再利用したものと考えられるものもあります。

写真のものは、ほぞ穴があけられた長さ約 2mの板材であり、建物の壁として用いられていたようです。

土玉（どだま）

過去の調査で出土した資料から、本来は木製の輪が穴に通されていたことが分かっていますが、その用い方には様々な意見がある謎の遺物です。

◎土曜講座のおしらせ

11 月 24 日（土）13：30 ～ 15：00　　於：鳥取市青谷町総合支所 2 階多目的ホール

〈トークセッション〉

「海辺の村を読み解く～青谷上寺地遺跡 と秋里遺跡～」

下記問合せ先まで電話・ファクシミリ・電子メールでお申込みください。

鳥取県埋蔵文化財センター 青谷調査室

〒689-0592　鳥取県鳥取市青谷町青谷 667（鳥取市青谷町総合支所 2 階）

電話（0857）85-5011　FAX（0857）85-5012

ホームページ　http://www.pref.tottori.lg.jp/maibun/　　E-mail　maibuncenter@pref.tottori.lg.jp

Facebook　https://www.facebook.com/yayoi.aoyakamijichi/

平成 30 年度

とっとり弥生の王国

国史跡 青谷上寺地遺跡（あおやかみじちいせき） 第 18 次発掘調査 現地説明会資料

平成 30 年 11 月 17 日（土）

鳥取県埋蔵文化財センター

第 18 次発掘調査の概要

第 18 次発掘調査区は、弥生時代の人々の活動の拠点である中心域と、その北側に広がっていた内海（古青谷湾）との境界付近に当たります。２ヶ年かけて行う本調査は、これまでほとんど明らかでなかった、遺跡北側エリアの様相を明らかにしようとするものです。１年目の今年度は、弥生時代終末期（約 1800 年前）の遺構を調査し、当時の人々の活動の痕跡を探っています。

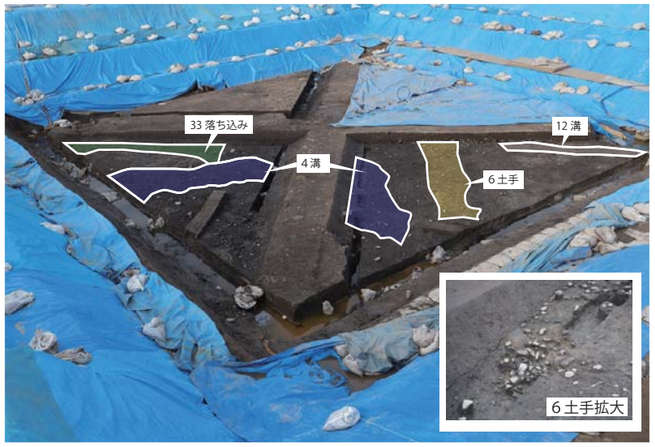
◎第 18 次発掘調査の成果

○今年度の調査成果

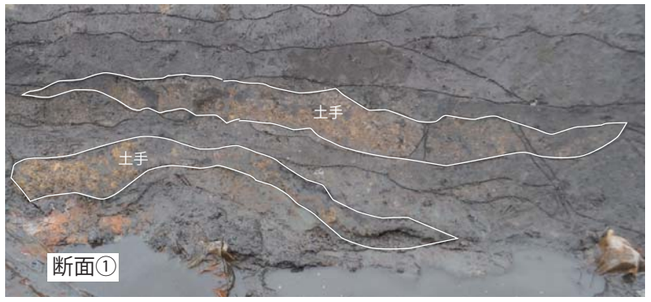
今年度の調査では、弥生時代終末期（約 1800 年前）に中心域北側でインフラ整備のための土木工事を繰り返し行っていた様子が明らかとなりました。

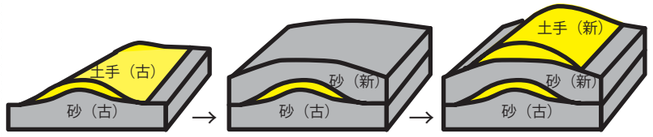
○自然とのたたかい

土層断面の観察から、弥生時代終末期の当調査区は、頻繁に砂が流れ込む軟弱な地盤であったことが分かります。しかし当時の人々は、この場所を利用するため、様々な土木工事を行っていました。土手の造り直しや遺構の切りあいなど断面や平面の状況から、砂の堆積で埋もれながらも土木工事が繰り返し行われたことが確認でき、この場所が青谷上寺地遺跡の人々にとって維持していかなければならない重要な場所であったことがうかがえます。

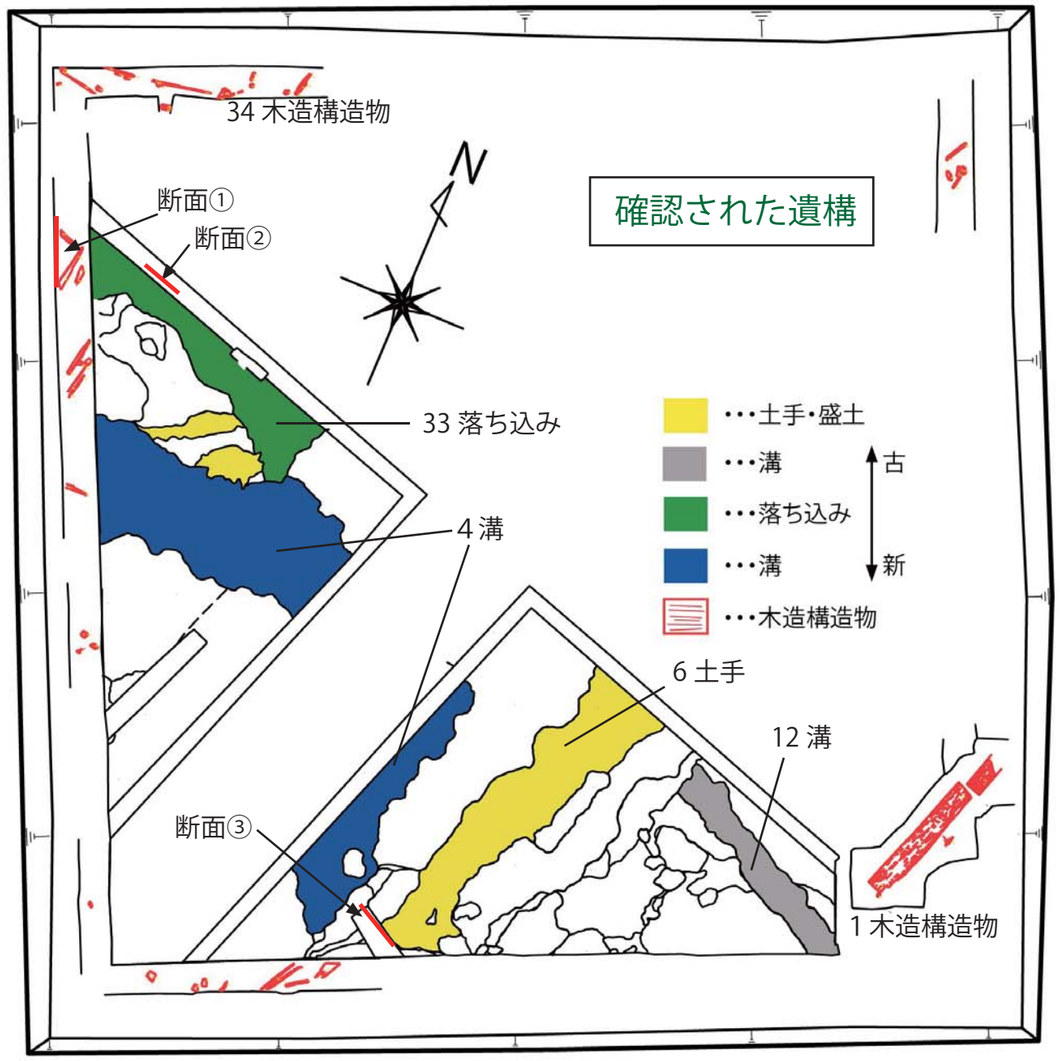


遺構を検出した様子
６土手からは多数の石が出土しました。土手の脇の落ち込みや溝の上面からは多量の土器片が出土しています。





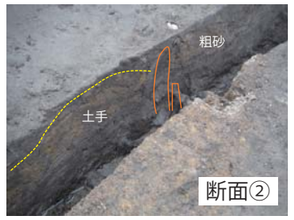
土手の土層断面（上）と構築の模式図（下）
土手の盛土には黄色い土砂が多く含まれています。断面①の部分では砂に埋もれてしまったのちも、土手がつくり直されたことが確認できます。

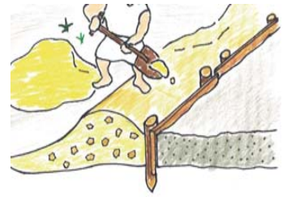


5 m
（S=1/100）

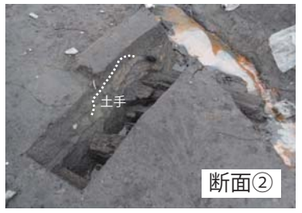
○木造構造物

調査時の排水のため深く掘り下げた調査区周囲の溝から、杭や板を組み合わせてつくられた木造構造物がみつかっています。調査の進展によって、これらの構造物が、水路の護岸、土手の芯材や土留めとして設置されたことが分かってきました。





土手の土留め　板材で仕切って盛土をし、土手を形成しています。



土手の芯材　角材を縦に並べ、それを芯として土手を形成しています。

護岸　板材を杭で固定し、水路の護岸としています。

○今後にむけて

今年度の調査によって中心域北側が、遺跡の最盛期後半にあたる弥生時代終末期に繰り返し行われた土木工事で維持されてきたことが明らかとなりました。中心域から標高を下げ古青谷湾に近接するロケーションと、脆弱な地盤を改良するための土木工事という今回の調査成果から、確認された遺構群は広い意味での港湾施設の可能性が考えられ注目されます。今後の調査によって、構築された構造物の機能が明らかとなっていくことで、遺跡北側エリアの実態の解明が期待されます。